

早稲田大学 人間科学部 国語 講評

〔総合分析〕

出題形式	全問マーク式
試験時間	60分(現代文1問、古漢1問)
難易度	昨年比、易化

〔大問別講評〕

(一) 評論文。「デカルトの機械論哲学」について。

出典：久保明教の文章による。

《本文字数：約 4300 字＝昨年より約 100 字減少。設問数：12＝昨年と同じ。》

小問	難易度	コメント
問一	やや易	【漢字】a＝「混迷」、b＝「収奪」。いずれも正解したい。
問二	易	【空欄補充】それぞれ直前の内容から明らかである。14行目にはまとめもある。
問三	やや易	【傍線部説明】直前の「近代的思考」、及び、傍線部自体から容易に判断できる。
問四	標準	【傍線部説明】直後の一文、及び、傍線部自体から判断できる。
問五	やや易	【空欄補充】D・Eともに直後の一文で言い換えられている。
問六	標準	【傍線部説明】直前の「アリストテレス自然学」についての説明から判断できる。口は「両者を比較～」以下が不適切。
問七	やや易	【空欄補充】二つの空欄それぞれの直後の内容から容易に判断できる。
問八	標準	【傍線部説明】「アリストテレス」については、25行と28行に説明がある。
問九	標準	【傍線部説明】直前の「自然のうちにある合目的性が～」以下から判断できる。消去法も有効だろう。
問十	やや難	【傍線部理解】「比較の内在性」については、前段落の第二文にある。ホは、「人間が機械に対して『製作者』として内在している」点が不足しているが、他と比較するとこれを選ぶべきだと判断する。
問十一	標準	【傍線部説明】直前の一文の内容から判断する。
問十二	標準	【内容合致】イは、第2・第7段落の内容から読み取れる。へは、最終段落の内容に合致する。ホは「対照的に」が不適切である。

(二) 古文・漢文。出典：古文＝『恋路ゆかしき大将』・漢文＝『史記』留侯世家。

《本文字数：古文＝約 850 字＝昨年より約 50 字減少。

漢文＝168 字＝昨年より 30 字増加。設問数(漢文・古文合計)：13＝昨年より 2 問増加。》

小問	難易度	コメント
問十三	やや易	【人物関係把握】1～4行目の内容から判断できる。
問十四	やや易	【文脈把握】1～3行目の内容から判断できる。
問十五	やや難	【空欄補充】最終段落で、致仕の大臣がもとの右大臣になり関白にも任じられたことに着目する。
問十六	やや難	【傍線部理解】問十五と同じく、致仕の大臣が関白に任じられたことをふまえる。関白が帝に奏上し、致仕の大臣が新たな関白になったということは…？ 消去法が有効である。
問十七	標準	【傍線部理解】「をこぶ」で「愚かなさまである・ばかばかしく見える」の意。 重要古語「をこなり」「をこがまし」から連想したい。
問十八	易	【文法】「なり」の識別。形容動詞の活用語尾を選ぶ。基本中の基本。
問十九	標準	【傍線部理解】傍線末の「えきかず」からイ・ニ・ホにしぼる。傍線の主語が「大将」「内侍ども」でないことは容易に判断できるだろう。
問二十	やや易	【傍線部理解】傍線の「疾」が「病気」の意であることは直後から容易に判断できる。
問二十一	やや易	【傍線部理解】傍線の「易」は「変える」の意。高祖が太子を変えようとしたことはリード文にも示されている。
問二十二	やや易	【傍線部理解】次文「四人前…言名姓」とうまくつながる選択肢はイしかない。
問二十三	易	【語句の読み】「為人(ひととなり)」は入試頻出。基本中の基本。
問二十四	標準	【返り点】大意が示されているので難しくはない。甲乙点に慣れていたか。
問二十五	標準	【内容合致】本文後半の内容を正確につかめたか。イは後半が明らかに不適。

〔総合コメント・今後の指針〕

全体の難易度は、昨年より易化した。

大問一は、「デカルトの機械論的哲学」についての評論文。昨年より易化した。本文字数は約 4300 字。本学部は 16 年以降 4000 字をこえる長文を出題している。デカルトの機械論哲学は入試頻出論点であるし、昨年と比べると紛らわしい選択肢は少なく基本・標準レベルの設問がほとんどだったので、論点の学習をしてきた受験生はそれほど苦戦しなかつただろう。論点の学習もしっかりしておきたい。

大問二の古文は『恋路ゆかしき大将』、漢文は『史記』。設問数は増加したものの、昨年より易化した。設問数は 16 年＝9、17 年＝11、18 年＝13、と増加傾向にある。基本・標準レベルの設問はしっかり得点しておきたい。なお、本学部は 15 年から漢文をしっかり読み込ませる問題を出題している。句形はもちろん、読解の学習も地道にしておきたい。